



口腔咽頭の臨床 第3版

監修：日本口腔・咽頭科学会

A4・頁220 2015年9月 定価：本体15,000円＋税
[ISBN978-4-260-02163-0] 医学書院刊

＜書評者＞ 宇佐美真一（信州大耳鼻咽喉科学・教授）

耳鼻咽喉科はカバーする領域が広く、多くのサブスペシャリティ領域から成り立っているのが特徴である。なかでも口腔咽頭領域は、耳鼻咽喉科の重要なサブスペシャリティ領域の1つとしてこれまで発展を遂げてきた。口腔咽頭領域の疾患の多くは直接明視できることから、視診がまず診察の第一歩として重要である。日本口腔・咽頭科学会が監修している本書は、1998年の初版発行の際からイラスト、カラー写真をふんだんに使用し、われわれ耳鼻咽喉科医が口腔咽頭領域の診察をするうえで重要な情報を提供してくれる書として好評を博してきた。

この領域は味覚、摂食、嚥下、構音といった生活の質（QOL）を左右する重要な機能を扱っており、われわれ耳鼻咽喉科医にとってこの領域の疾患を正しく診断し、適切な治療をしていくことは重要な責務の1つである。またこの領域は、免疫学、分子腫瘍学とも関連が深く、ここ数年で急速な進歩がみられた分野でもある。今回の改訂第3版では、それぞれの疾患に関して最近明らかになってきた新たな知見を紹介してくれている。例えば、最近腎臓内科からの紹介が増えてきているIgA腎症との関連性、扁桃摘出術の有効性に

いても詳細にレビューされており、日常臨床に必要なエッセンスがコンパクトにまとめられている。また、最近新たに登場してきたHIV関連唾液腺疾患、IgG4関連疾患などの疾患概念、さらに社会的にも重要視されている睡眠時無呼吸症候群、嚥下障害などについても多くのページを割き、詳細かついねいに解説してくれている。この領域の良性腫瘍、悪性腫瘍の取り扱いも耳鼻咽喉科医にとって重要であるが、診断から治療までわかりやすく概説されている。また治療、特に手術に関しては、最近の内視鏡を用いたより低侵襲の手術が主流となってきたが、本書はそういった治療面での情報も過不足なくアップデートされている。

そして何ととっても本書のよさは、まさに本を開くと見開きで疾患のエッセンスが目飛び込んでくることではないだろうか。各疾患のスペシャリストがそれぞれの診断や治療について非常にわかりやすく解説しており、この領域を専門としていない耳鼻咽喉科医にとっても非常に便利な書となっている。われわれ耳鼻咽喉科を専門とする医師が常に診察の際に座右に置きたい書の1つとして推薦したい。